令和４年度　東北地区高等学校ＰＴＡ連合会

進路対策委員会活動報告書

担当：秋田県高等学校ＰＴＡ連合会

『ご挨拶』

東北地区高等学校PTA連合会　進路対策委員長
（秋田県高等学校PTA連合会会長）　　樫　尾　春　香

今年度の進路対策委員会は、皆様のご理解とご協力をいただき、3年ぶりに集合型で開催することができました。久しぶりの集合型での開催ということもあり、手探りの状態での企画・運営となりましたが、第２回進路対策委員会では、グローバル人材の養成で注目されている国際教養大学を訪問するとともに、同大学の卒業生でプロスポーツ界の経営者として活躍している水野勇気氏の講演を拝聴し、数多くの学びと気付きを得ることができました。また、第3回進路対策委員会では、（株）リクルートの高橋卓見氏の講演を拝聴し、その内容を基に座談会を行い、子どもの進路への関わり方について話し合いを深めることができました。

Society5.0の実現など社会全体が急速に変化する中で、私たちはより複雑化する課題に直面しております。こうした社会の変化に立ちすくむのではなく、子どもたち一人一人が自ら個性を磨き、創造性を伸ばし、心豊かな大人に成長することができるよう、親としても学びを止めることなく、子どもたちを支えていきたいと考えております。ポストコロナ時代を見据え、皆様のPTA活動が今後ますます発展することを願い、進路対策委員会の活動報告をいたします。

委員長	樫　尾　春　香	（秋田県:大曲農業高等学校）
副委員長	金　沢　直　樹	（秋田県:横手清陵学院高等学校）
	村　上　智加子	（岩手県:盛岡第二高等学校）
委　員	佐々木　長　栄	（青森県:尾上総合高等学校）
	森　　政　徳	（宮城県:岩出山高等学校）
	佐　藤　明　博	（山形県:鶴岡北高等学校）
	前　田　賢　一	（福島県:いわき総合高等学校）
事務局	菅　原　　研	（岩手県:盛岡第二高等学校）
	佐　藤　博　志	（青森県:尾上総合高等学校）
	小　室　昌　弘	（宮城県:岩出山高等学校）
	齋　藤　静　子	（山形県:鶴岡北高等学校）
	庄　谷　千鶴子	（福島県:いわき総合高等学校）

＜　活　動　報　告　＞

１．第１回進路対策委員会　　6月 7日（火）：青森市　青森県観光物産館アスパム

内　容 ①令和４年度の活動について

今年度の活動内容と日程・会場についての事務局からの提案を協議しました。コロナ禍は続きますが、委員会活動は感染防止対策を徹底しつつ可能な限り対面で2回実施活動することを確認しました。

２．第２回進路対策委員会　　１１月１１日（金）：秋田市　国際教養大学
パーティーギャラリーIYATAKA

内　容 ①国際教養大学大学訪問（学生らによる学校説明と施設見学、交流会）

②講演会　演題　　「バスケで秋田を元気に　～ゼロからの挑戦～」
講師　　秋田ノーザンハピネッツ（株）代表取締役社長　水野 勇気　氏

③情報交換

第２回委員会は、秋田県進路対策委員会と合同で開催しました。グローバルな人材育成に力を入れている国際教養大学を訪問し、大学の教育理念と教育活動について学びました。同大学卒業生でプロスポーツ界の若き経営者として活躍されている水野勇気氏の講演を通して、大学の目指す教育をより深く理解していただきました。

２．第３回進路対策委員会　　１２月１６日（金）：秋田市　秋田県生涯学習センター

内　容 ①講演会　演題　　「これからの社会を生き抜く子どもたちのために
保護者に求められていること」
講師　　（株）リクルート学び教育支援Division支援推進3部
東北グループマネージャー　　高 橋 卓見　氏

②座談会　　次ページの「特集」をご覧ください。

③情報交換　各県の進路対策の活動状況について

第３回委員会は、（株）リクルートの高橋卓見氏をお呼びし、全国高Ｐ連がリクルート社と合同調査している「高校生と保護者の進路に関する意識調査２０２１」の結果と新しい高校教育の動向をお話をいただき、これからの社会を生き抜く子どもたちのために保護者に求められていることについてご講演をいただきました。その後、ご講演の内容を話題に委員会で座談会を行い、子どもの進路への親の関わり方について意見を出し合い、理解を深めました。

特集：座談会「子どもの進路への親の関わり方について考える」

於：第３回進路対策委員会

参加者 ： 樫 尾 春 香（委員長）　金 沢 直 樹（副委員長）
森　政 徳（委　員）　佐 藤 明 博（委　員）
佐 藤　尚（岩手県高P連事務局長）　佐 藤 博 志教諭（青森県事務局）
小 室 昌 弘教頭（宮城県事務局）　齋 藤 静 子教諭（山形県事務局）
庄 谷 千鶴子教諭（福島県事務局）　石 井　潔（秋田県高P連事務局長）
アドバイザー ： 高橋卓見 氏（講演会講師）

論点１：コロナによって、親子のコミュニケーションはどのようになっている？

樫　尾　私の場合は、平日は時間をとるのは難しいが、休日は必ず家族一緒に過ごす時間を作っており、その時の会話を大切にしている。コロナ禍で確実に時間は増えた。

佐藤（博）　学校ではコロナ禍によって生徒の活動が中止・縮小された。２年生は、中学校で修学旅行ができなかったので、検討を重ね修学旅行を実施した。コロナ感染者も出たが、子どもたちの反応はとてもよかった。行事が復活して、ようやく普通の学校生活が送れるようになっている。

佐藤（明）　私の場合は、高校生になってスマホを持たせたからか、親子の会話が少なくなった。しかし、３年生になってからは、必然的に進路についての会話は増えている。

佐藤博志教諭（青森県）

金　沢　私の場合は、仕事柄も含め夜家にいることが少なく、今までは「今日も居ないの？」の会話が普通であったが、コロナ禍になってここ２・３年はコミュニケーションは増えている。「今日も居るの？」から始まり、将来のことなど親子の会話は増えている。最近は夜のリビングでの父親の居場所もできている（笑）。

論点２：子どもの進路選択について、高校生が考える保護者のほどよい関わりとはどういう関わりか？

森　私の場合は、子どもの就職の内定をいただくまでの間、親子で話し合う機会を持つようになった。２年生までは運動部活動を一生懸命頑張っていたこともあり、スポーツにかかわる接客や専門の仕事を考えていた。アルバイトでも接客の仕事をしていたのも影響があったと思う。３年生になってからは、親子で話し合うことで接客業の捉え方が変わり、幅広く考えられるようになったと思う。

森 政徳委員（宮城県）

佐藤（明）　私の場合は、子どもから求められた時にはいつでも対応できるように普段から意識はしている。

佐藤明博委員（山形県）

樫　尾　学校からは、子どもが１年生の時から進路について親子で考える機会を持つよう求められていた。２年生になってからは親が進路で気になることを子どもを通して学校に質問等をしてきた。そのおかげもあって、進路に関する親子の会話は確実に増えた。子どもの進路の話は、親子の会話のきっかけになるということに気づかされた。ところで、親が学校に進路にかかわる質問することは学校として大丈夫なのだろうか？

庄谷千鶴子教諭（福島県）

庄　谷　学校では生徒への進路指導を継続的に行っているが、保護者の皆さんからの質問は微妙なずれを解消できたりするので、必要に応じて保護者の皆さんが学校に質問することは、非常にありがたい。

齋藤（静）本校は進学校であるが、進学後の生徒たちの希望する進路はそれぞれ違うので、多様性のある進路指導を目指している。

金　沢　秋田県の進路対策委員会では、子どもの進路や県内就職について、県の担当課から指導を受けながら委員会で進路対策を検討している。具体的には、奨学金制度等について各高校のホームページとリンクできないかなど多くの保護者に周知する方法などを話題にしている。

高橋アドバイザーから

- **1年生の段階では、就職や仕事のイメージはなかなかわかないと思う。学年が上がり文理選択などが決まることで進路選択の路線がある程度決まってくるので、1年生の段階では、あえて子どもの視野を広げることをやるべきではないかと考える。**
- **視野を広げさせるためには、「連想」が必要である。「連想」するためには、子どもに瞬間瞬間に「何で？」と聞いていってあげることで、子どもはその本質に最終的にたどり着くことができる。**
- **学校現場でよく耳にすることが、親が子どもに一方的に意見することである。押し付けにならないよう、子どもが何をしたいのかというところを大切にし、決して先入観で対応しないことが大事である。**
- **子どもの進路については、放任ではなく、会話の中から子どもの意見や意志を引き出していくことが大切である。放任の反対は、「足場かけ」。親が足場をかけてあげて、その先は子ども主体でずっと進んでいくイメージで子どもに関わってほしい。**

論点３：未来を担う子どもたちに親としてどのようにサポートしていけばいいか？

樫尾春香委員長（秋田県）

樫 尾　私たちの時代は対面で関わるのが普通であったが、私たち親が今をしっかりとみて、昔と比べる必要はないのではないかと感じている。見守ることが大事である。

森　親として子どもをどこまでサポートしていけるかどうかは本音ではわからないが、成人年齢引き下げによって１８歳からもう大人である。先日県の研修会で弁護士から話を聞いたが、ほとんどの親の願いはお金で困ってほしくはないことであった。金融についてはしっかり教え、子どもを守れるようにしたいと思っている。

佐藤（明）奨学金も借金であることは教えないといけない。

齋藤静子教諭（山形県）

齋藤（静）２０２２年４月から１８歳成人になった。今年度から家庭科の授業で奨学金も借金であることや金融リテラシーについて、１年生の生徒に教えなければならない。生徒は経験値が少なく、キャシュレス決済なども不安があるのはあたりまえであるが、社会人になってから、多くのことを体験しながら、学ばなければならないだろう。
自分自身も教えるために、数年前から勉強をしてきた。現在も何をどのように教えるべきか、試行錯誤しながらやっている。情報Ｉも担当し、プログラミング授業も今年から行ったが、やり方を教えると自発的に生徒は勉強をしている。１年生であるが、スマホは平日、家に帰ってから３時間程度使用しているのが普通とのこと。
これはストレス解消が多いようであるが、１日３時間も使用しては勉強に支障がでるのはあたりまえであると思う。このことはこれからも課題であると思う。

金　沢　親世代は経験したことは話ができるが、将来はどう変わっていくかは私たちもわからないので、親と子が一緒になって考えていくこと、話をしていくことが大切であると思う。

論点４：子どもたちのICTの活用について家庭でサポートできることは何か？

小室昌弘教頭（宮城県）

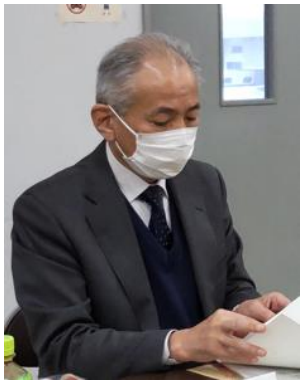
小　室　本校は普通科ではあるが、１年生の最初からＩＣＴの指導をしている。ＩＣＴは１人１台で調べ学習をするなど授業中にも日常的に使ってる。
i-Padは抵抗なく使っている。既に中学校から１人１台ＩＣＴを使っていることが根底にある。
先生からのクラス連絡などもGoogleでお知らせしたり、課題もGoogle Classroomを使用して発信している。
職員会議もペーパーレスで、i-Padを使用して会議している。
先生たちも研修を重ね、使い込んでいる。

石　井　秋田県高Ｐ連で実施している県教委との「教育懇談会」で、今年度はＩＣＴの教育について話題になった。県教委からは、
・県立高校は１人に１台ＩＣＴを配布。使い方については学校に一任している。
・先生たちのスキルに差があることが課題としてあるが、学校によっては専門家を招聘して能力別に教員研修を実施することで教員全体の底上げを図っている学校もある。
・利用のルールについては、教科「情報」や科目「公民」を中心に、生徒の情報モラル教育を徹底させている。

・生徒は肖像権の侵害を理解できることが大事、教員は法の理解が大事である。
・時代は変わってきている。指導は高校からでは遅く、小学校の段階から年齢に応じた教育が必要である。

と、ご教示いただいた。ＩＣＴの使い方については保護者も課題意識をもって指導していく必要があると、共通認識を持った。

佐藤（尚）　ＩＣＴ利用は便利なようだが、準備をするのに時間がかかる。また、ＩＣＴを利用するための学校内の環境については、サーバーの容量の問題もあると伺っている。学校によっては、板書をすることなくＩＣＴを使った授業もあるようだ。学校現場では、ノートに鉛筆で書くという作業は確実に減っている。時間短縮にはなって効率も良いが、古い人間なのだろうか、果たしてそれでいいのか個人的には少し疑問に思うところがある。



岩手県高P連佐藤尚事務局長

高橋アドバイザーから

・論点３については、生徒は未来社会の認識についてポジティブに捉えている。未来社会については、先入観ではなくフラットに捉えることが大事である。子どもが社会に出た時に、価値観が日々多様化している事実を親世代が理解するのは時間がかかると思われるが、事実を受け入れ、前向きに捉え、共感していくという姿勢が必要である。

・論点４については、ＩＣＴを活用する際にやってはいけない事を子どもが理解するのには時間がかかるが、操作の面については子どもの方が長けている。親が『子どもに学ばさせてもらう』姿勢を持つことで親子の良好なコミュニケーションが取れるのではないかと思う。

・ＩＣＴ端末は、文科省の「ＧＩＧＡスクール構想」によって全国のすべての小・中学校にすでに導入されている。高校については自治体に任せられているが、少なくとも来年度までにはＩＣＴ端末が全国すべての学校で揃う予定であると伺っている。学校でも電子黒板やWi-Ｆi環境が整い始めている。

・ＩＣＴを使うにあたっては、その目的を見失わないことが大事である。

・校内の授業をＩＣＴ化していく目的は、

①共同学習をいかに促進させていくか？

②個別最適な学習をどのように促進させていくか？

で、これらの目的がかなう授業づくりを各学校でご苦労されていることを感じる。

・紙に書くことが減ってきていることのご意見については、個人的には懸念しているところである。弊社では様々な教材を提供しているが、個人的には、ただ話を聞いたり動画を見たりするだけでは知識の定着や深い思考に繋がらないと考えている。見ながら書いて考えてみたり、考えたものを発話して自分の耳に入れていったり、友達と会話していくことがむしろ本質的なのかなっと思っている。

・あくまでもＩＣＴはツールなのであるが、今は過渡期なのでどう使うかにフォーカスされている。主体的、対話的で深い学びをしたいという目的に対して、理解を伴うように意見したことを書いて

みたり、意見を出して対話したりすることがないがしろにならないよう上手にＩＣＴを使っていく必要がある。

金　沢　　この座談会では、結論を出す会ではなく、意見を出し合い、共有し、今後の各県の活動に活かしていくことが目的であった。皆さんの貴重なご意見ありがとうございました。
また、アドバイスいただいた高橋様からは的確なアドバイスをいただきありがとうございました。
これをもって、座談会を終了します。ご協力ありがとうございました。

金沢直樹副委員長（秋田県：司会）

第３回委員会に参加できなかった委員の皆様から寄稿をいただきました。

「進路対策委員会に参加して」

進路対策委員会副委員長　村上　智加子
（岩手県立盛岡第二高等学校）

東北地区高Ｐ連の会議に出席し、東北各県の進路委員長の皆さんと交流の機会を得たことは、大変ありがたいことでした。出席できたのは第２回進路対策委員会のみでしたが、国際教養大学訪問や秋田ノーザンハピネッツの水野勇気代表取締役社長の講演など、大変印象に残りました。偶然にも当日キャンパス内を案内して下さった学生さんは盛岡出身でしたし、盛岡二高のＯＰも入学しています。
１時間半限定ではありましたが、学生時代に戻った気分になりました。子どもの進路決定に関して保護者の皆さんは、「先生にお任せ」でも「子どもにお任せ」でもない第三の道を手探りしている状況ではないでしょうか。
他の保護者の方と情報交換する機会も多くはありません。ネット検索などにより情報を得ることは昔より容易にはなっていますが、やはり人と会って話を聞く・する中で多くの学びがあると感じた２日間でした。

「進路対策委員会に参加して」

進路対策委員会委員　前　田　賢　一
（福島県立いわき総合高等学校）

今年度、東北地区高Ｐ連進路対策委員の任を受け、改めて今の生徒達の進路について知る機会をいただきました。子供達にとって有意義な委員会にしたいと思っていました。
私の息子は今年度卒業を迎えました。私も息子も、大学には進学せずに飲食の道を歩むことになりましたが、他の御家庭ではどのような事を考えながら高校の３年間を過ごしたのか、委員の皆さんと意見を交わすことで知ることができました。
また、国際教養大学の見学や、プロバスケットボールチーム運営会社の社長さんのお話を聞くことで、今の時世を感じることができました。来年度もこの活動を引き継ぎ、より良い委員会にしていただきたいです。　一年間、ありがとうございました。